



文化財愛護
シンボルマーク

中山古墳群発掘調査報告書

—第3次—



年3月

見町教育委員会

は じ め に

今回の発掘調査は、島根石見農業協同組合の要請によるもので、同組合の石見トップノウキヨウ（株）の工場建設が中山古墳群のA地区に予定されたことにより発掘調査を実施いたしました。

中山古墳群は、昭和51年に花木閉地造成工事に際し古墳が一部破壊され、同古墳群のA・B地区は緊急調査を実施した所であります。中山丘陵上に連なる数多い他地区の古墳については調査がほとんどなされておりません。今回の調査対象地区も未調査の箇所であり、丘陵の半分は鉄穴流により崩壊した所もあって、残存部分の調査となりました。

調査の結果、主要部分の一部を検出したにすぎず、出土遺物も数が少く、中山古墳群の全貌を明らかにする資料とはなり得ませんでしたが、今まで知られていなかった古墳の存在を明らかにすることができました。今後の調査に期待するものであります。

今回の調査は、島根教育委員会文化課の度重なる来町のうえご助言を賜り、作業にあたっては地元関係各位のご協力を得ましたことに対し、衷心よりお礼申し上げます。

平成元年 3月

石見町教育委員会教育長 兼 常 翬

例　　言

1. 本書は、石見トップノウキヨウ株式会社建設予定地内における埋蔵文化の発掘調査記録である。
2. 調査は、島根石見農業協同組合の委託により石見町教育委員会が、昭和63年9月24日から同年10月8日までの現地調査、以後補足調査並びに報告書作成作業を行った。
3. 調査地点は、井原川、濁川、県道江津三次線に囲まれた中山丘陵の南端中山3,621-1、3,198-13番地である。
4. 調査体制は下記のとおりである。

調査指導　　島根県教育委員会文化課

石見町文化財保護審議会

会長　池田　浩

委員　駅場　春樹

岡田　博

山崎　武

藤田　典幸

主任調査員　　宮本　徳昭（島根県文化財保護指導委員）

調査員　　吉川　正（　　同　上　　）

事務局　　石見町教育委員会教育長　兼　常磐

社会教育課長　田中　雅文

社会教育主事　松川　伸作

派遣社会教育主事　尾畠　烈

5. 本書の執筆は、日次に明記し、編集は宮本が担当した。
6. 本書の方位は、現地調査での磁北を示す。地形測量は、大屋測量有限会社に委託した。
7. この調査にかかわる資料は、石見町教育委員会において保管している。

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗棋、すなわち斗と棋の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

本文目次

調査に至る経過	(町教育委員会)	4
位置と環境	(吉川 正)	5
中山古墳群の概要	(同 上)	8
調査結果	(宮本徳昭)	10
まとめ	(同 上)	15

● 捜図目次

第1図 石見町の位置	4
第2図 周辺の遺跡	5
第3図 中山古墳群分布図	7
第4図 地形測量図(造構配置図)	9
第5図 II区土層実測図	11
第6図 石材実測図	11
第7図 III区土拡実測図	12
第8図 埋葬施設実測図	13
第9図 須恵器実測図	14

● 図版目次

I	調査後全景
II	1. I・II区調査前全景 2. I・II区調査後全景 3. I区東溝全景
III	1. II区調査後全景 2. II区南北土層状況 3. II区東西土層状況
IV	1. III区東土拡近景 2. III区西上拡土層状況 3. IV区調査前全景 4. AO6号墳検出状況
V	1. AO6号墳検出状況 2. AO6号墳埋葬施設つめ土検出状況 3. AO6号墳埋葬施設完掘状況
VI	1. 石材(表) 2. 石材(裏) 3. 須恵器

調査に至る経過

昭和63年7月初旬、島根石見農業協同組合より中山古墳群の南端に石見トップノウキヨウ(株)の工場を建設したい旨の開発協議がありました。中山古墳群は、山間部としては驚異的な数の一大古墳群であり、石見町の誇りとする貴重な文化遺産であります。

石見町教育委員会では、場所変更を含めた協議を行いました。しかし、他に適当な工場用地がないということでお県教育委員会文化課と協議し、県文化課と瑞穂町在住吉川正氏に現地確認をお願いしました。この時点で85m程度の調査ということになりました。

町教育委員会には発掘調査担当者がいないため、県文化課と協議しました。その結果県の石見空港予定地内遺跡発掘調査の調査補助員浜田市在住の宮本徳昭氏に委頼することとなり、同氏の諒承のもとに県文化課の絶大なるご協力で調査を実施することになりました。

調査は面積160m²、日数10日間の予定で、昭和63年9月24日から開始しました。調査中島根石見農業協同組合より工場敷地拡大等の申し入れがありました。再度県文化課とさらに町文化財保護審議会を含め協議した結果、最終的に調査面積は450m²、日数15日間となり、同年10月8日に終了しました。



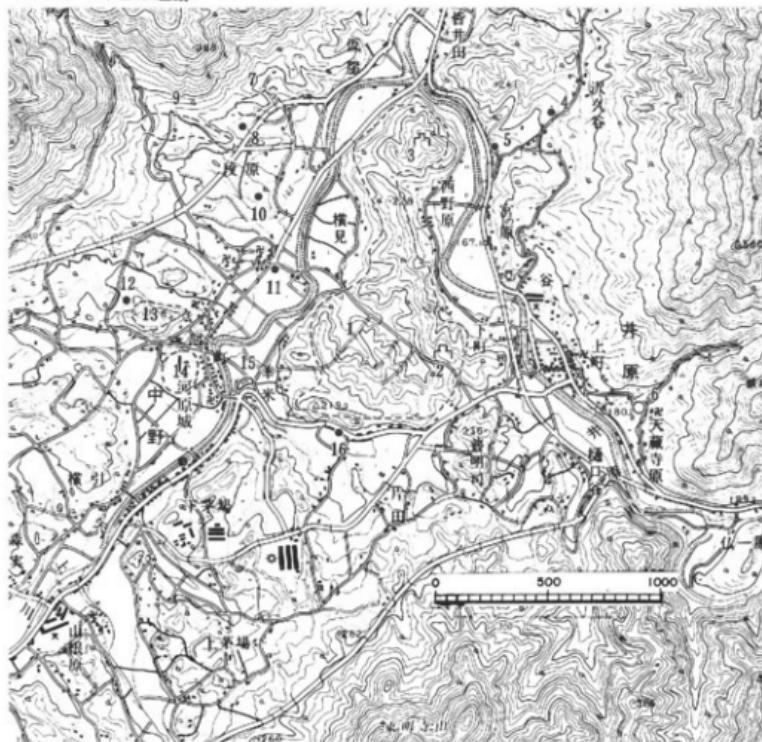
第1図 石見町の位置

位置と環境

中山古墳群は、島根県邑智郡石見町大字中野の中山丘陵一帯に分布する大規模な古墳群である。この中山丘陵は於保地盆地の入口部に所在し、南は県道浜田一作木線、東は井原川、西は矢上川によって三角形状に囲まれた独立丘陵であり、この丘陵に立つと於保地盆地のほぼ全域を一望できる絶好の場所に位置している。

ところで、邑智郡という地名はこの於保地盆地に由来していると考えられており、この一帯が邑智郡の古代社会の中心地域であったことが想定されるのである。

第2図 周辺の遺跡



第2図 中山古墳群周辺の遺跡分布図

- | | | | |
|------------|------------|-----------|------------|
| 1. 中山古墳群 | 2. 平城跡 | 3. 稲光城跡 | 4. 庄塚古墳 |
| 5. 岩風呂遺跡 | 6. 天藏寺原遺跡 | 7. 仮屋古墳群 | 8. 田の迫原遺跡 |
| 9. 反原古墳群 | 10. 段原遺跡 | 11. 池の尻遺跡 | 12. 風呂ヶ谷遺跡 |
| 13. 賀茂山古墳群 | 14. 余勢の原遺跡 | 15. 和泉原遺跡 | 16. 片田遺跡 |

周辺の遺跡については（第2図）この地域の平地部が早くから水田化されており、丘陵部は中・近世の砂鉄採集に伴う鉄穴流しが盛んに行なわれていることもあるって十分に把握されているとはい難い。

縄文時代については、断魚築造より出土したと伝えられる後期の完形土器や割田古墳封土中の晩期の土器片、岩風呂遺跡から出土したと伝えられる石斧・磨石などが知られているだけで、生活遺構などは不明である。

中山丘陵西側の微高地に所在する余勢の原遺跡は大規模な集落跡であり、石見町総合グランドの造成工事に伴い多量の弥生式土器（前期後半～後期終末期）・土師器などが採集されており、この地域が比較的早い時期から弥生文化を受容していたことを示している。

また矢上川対岸に屹立する向歯無山の麓に所在する仮屋遺跡は、大正3年銅鐸3口が出土した著名な遺跡である。さらに中山丘陵の西麓の和泉原遺跡では古墳地方を中心に分布する特殊壺が出土しており、これらはこの中山古墳群出現の前史を知る上で重要な鍵を握る遺跡群である。

古墳時代に入ると弥生時代から引き続く遺跡の他、矢上川・井原川により形成された段丘面上に田の迫原遺跡・天藏寺原遺跡などの小規模な遺跡が出現し、しだいに集落が増加していくことが伺える。

中野賀茂神社背後の丘陵上には、小規模な円墳、方墳16基からなる賀茂山古墳群が知られている。この古墳群は中山古墳群とはほぼ同時期に営まれた古墳群と考えられる。このほか向歯無山山麓の段丘上には仮屋古墳群、反原古墳群など横穴式石室を主体とする小円墳数基からなる後期の古墳群があり、井原川対岸の段丘上には庄塚古墳が分布している。

中山古墳群B地区の前面に位置する池の尻遺跡では、圓場整備中に円面鏡が発見され、この近くに郡衙のあった可能性が考えられている。

さらに時代は下るが、この中山丘陵上には、南端（C地区）に平城・北端（E地区）に稻光城と呼ばれる小規模な中世山城跡が残されている。このことは、この中山丘陵が於保地盆地における重要な位置を占めていたことを示しているといえよう。



第3図 中山古墳群
古墳分布図

- 古 墳
 - 無墳丘墓

中山古墳群の概要

中山古墳群は、石見町の中心地域をなす保地盆地を一望できる中山丘陵一帯に分布する現在約80基からなる古墳群である。しかし、中世における平城・稻光城の築造・近世の鉄穴流し・近年の農地開発事業などにより多数の古墳が破壊されているであろうことを考えると、中山古墳群築造当時は、100基を優に越す古墳の分布があったことが想定され、山間部としては驚くべく大古墳群であるといえよう。

古墳群は、その地形からA～Fの6支群に分けることができるが、昭和51年秋の農地開発事業に伴い、A・C地区の一部とB地区について発掘調査が行なわれ、前方後方墳を含む古墳7基、尾根に直交する溝により方形に区画された無墳丘墓7基が検出され、無墳丘墓から高塚古墳へという当地方での墳墓の発展過程が明らかになった。

この無墳丘墓に供獻された壺・器台などの土器は、鍵尾I・II式の特徴をそなえたものが多く、一部には小谷式併行のものも含まれるが、全体として器形・施文・胎土・色調など出雲部の古式土器と酷似していることが注目される。

B1号墳は小形の前方後方墳であるが、その他C地区にも数基の前方後方墳の分布が推定されている。この種の古墳は、出雲部には比較的多く分布しており、出雲の古墳文化を代表するものであるが、これまでのところ石見部ではこの中山古墳以外で発見されておらず注目されている。

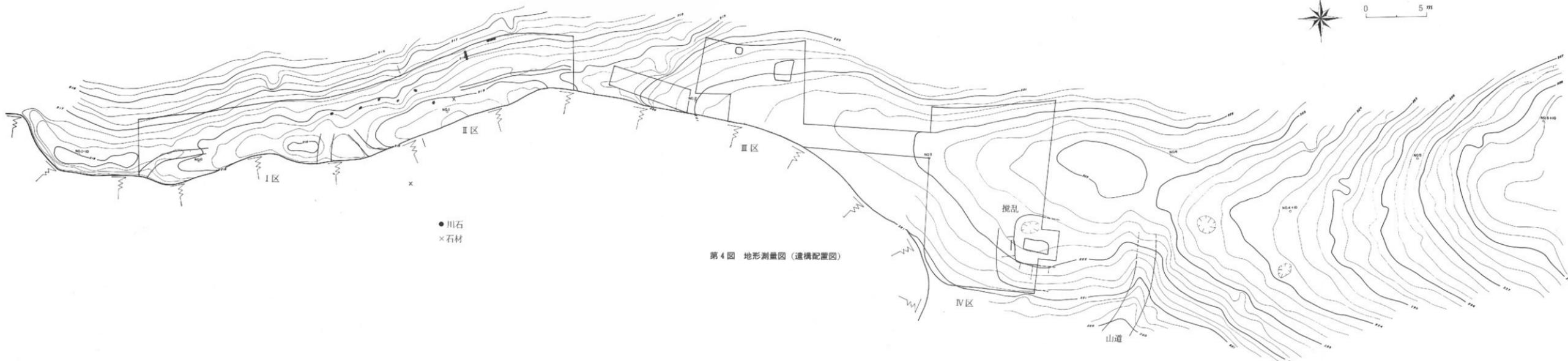
またB1号墳に副葬されていた方形板革縫短甲は、全国的に類例の少ない貴重なものである。D地区丘陵で偶然発見された須恵器の櫛形甌は古式の須恵器であり、幾内地方で製作されたものと考えられるが、これが当地にもたらされた背後には、極めて広い範囲にわたる文化的・社会的交流のあったことが想定されるのである。

中山古墳群全体の詳細な調査が行なわれていないため、全体としては不明な点も多いがC地区の一部には埴輪に貼石を廻す古い様相の古墳があり、またD地区には、小形の堅穴式石室を持つ古墳が数基分布している。しかし、当地方で古墳時代後期後半に盛行する横穴式石室を主体とする古墳は全く見受けられない。このことから、この中山古墳群は、全体として古墳時代の前期・中期に營まれたものと考えられ、中山古墳群の大きな特徴となっている。

中山古墳群の築造過程は概ね次のように考えられよう。

弥生時代末から古墳時代の初頭にかけて、当時の会社の発展に伴い、中山丘陵に箱式石棺・土括墓などを内部主体とする無墳丘墓が作り始められるが、やがて周辺地域とのかかりわり、社会の変化に伴い、4世紀後半の頃から高塚古墳の築造へと変化する。内部主体は当初は前代に引き続き箱式石棺などであったが、やがて堅穴式石室を主体とする古墳のように古墳らしい古墳が築かれる。しかし古墳時代後期後半には、盆地内の各所で横穴式石室を主体とする古墳が築かれるようになり、中山丘陵での古墳造営は中止されることとなるのである。

中山古墳群の個々の古墳の規模はさほど大きくなはないが、農業経営単位としてあまり大きくはないこの地域にこれだけの大古墳群が形成されていることは、当地方の古代社会の推移を探る上で極めて重要な意味を持つものといえよう。



調査結果

分布調査では、2基の古墳の極一部と東側に平坦面の一部が残っていると判断された。
その後、発掘調査の下見並びに範囲が拡張されたことにより第2回の分布調査を実施した。
この時は、第1回の確認と拡張部分に平坦面があることを確認した。

発掘調査前の表面調査では、分布調査の結果を確認するとともに丘陵頂上への尾根上に数基の古墳を想定した。

発掘調査の結果、古墳1基を確認し、溝状遺構3基・土括2基を検出し（第4図）数基の古墳の存在を予想できた。遺物は、須恵器1片・石材1片が出土し、石材1片を表採した。以下、発掘調査の過程並びに地形的なものに従い便宜上I～IV区に分け報告する。

I区

分布調査において、2基の古墳の極一部が残っているものと判断されたところである。丘陵尾根は、鉄穴流しにより江戸時代中期以前に破壊され南は崖になっており、北斜面の尾根縁から下が残っているだけであった。

調査は、分布調査の結果をふまえ崖線に沿ってのセクション1本とそれにはほぼ直交するセクション2本とを設定して行った。崖に近いところでは盛土状の層があったが、明確に古墳としての根拠になるものは確認できなかった。

表面観察で確認した東端の溝状遺構は、長さ約2m・幅約30cm・深さ約15cmで南東に低かった。同じく西端のものは、長さ約4m・幅約90cm・深さ約15cmで南西に低かった。同じく最高所の落ち込み状のものは、北側にかき出したような攪乱状のものであった。いずれも表土ないし表土のすぐ下のもので、時期・性格など不明であり遺物も出土しなかった。攪乱状のものの北斜面にあった川石は、II区のものとの関連が考えられる。

II区

I区同様尾根の大半は破壊されているが、尾根の一部が少し残っていた。分布調査では何も確認されなかったが、確認調査を実施した。

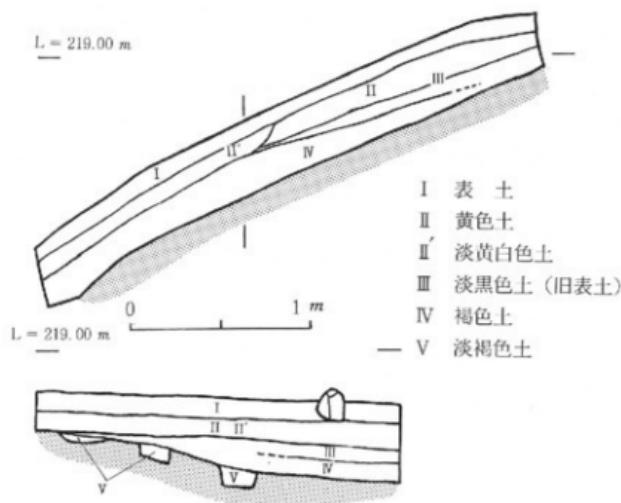
表上のすぐ下から等高線状に、両端が自然消滅のような長さ約9.5m・幅約30cm・深さ約20cmの溝1条を検出した。表土中からは、川石列が同じく等高線状に2段、また下段から階段状の川石列が1列あった。

上段石列西端付近から西へ地山が傾斜しており、石列の西では旧表土が残っていた。旧表土下第1層下面から地山に掘り込まれた柱穴状のものを3基検出した（第5図）。全体や性格を把握できなかったが、石列の西部分だけのようである。

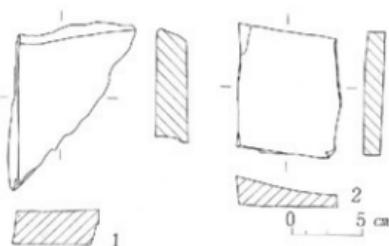
溝状遺構は、I区の東のものとよく似ているが、尾根との関係から性格が異なる可能性が高い。川石列の性格は不明であるが、溝状遺構と方向等がよく似ていることから関連がある可能性がある。しかし柱穴群とは無関係のようである。

溝状遺構の西端少し西の表土下第1層から、通称断魚石といわれる本古墳群で使用されている石と同じ石の小片1片が出土した。^(註5)また、崖から現場への急拠作った道の中段少し上、平面位置関係ではII区西端に近いところからも同様のものを発見した（第6図）。

溝状造構の斜面側約20~30cmのところは、地山の傾斜角度が急になっていた。したがって、古墳を想定するとき、北側の裾と考えられ、東側の裾は溝状造構東端あたりが考えられる。



第5図 II区土層実測図



第6図 石材実測図 (1. II区・2. 崖)

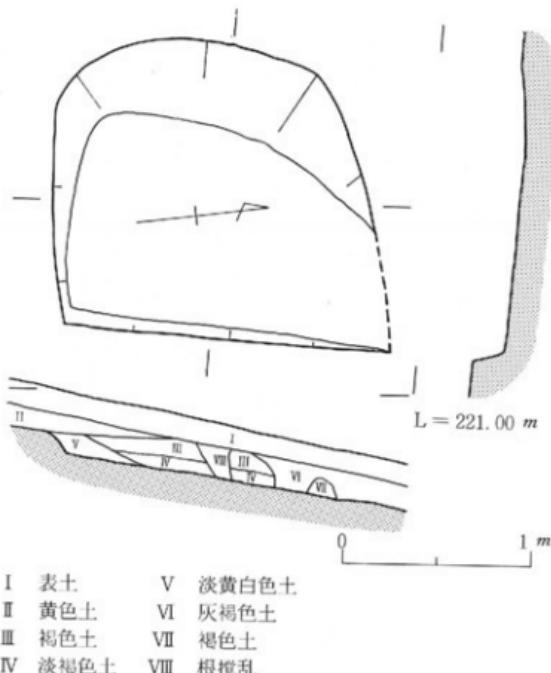
III 区

尾根の北側半分ないし主要部分は残っていたが、南側は破壊されていた。分布調査では何も確認されなかったが、確認調査を実施した。

西側斜面は、自然地形であった。尾根平坦面は、地山が不安定であったが遺構は検出されなかったが、中央部北斜面から2基の遺構を検出した。

第7図のものは、古墳の埋葬施設を予想させたが、底の状況やプランからその可能性は少ない。もう1基表土直下から検出したものは、径約60cm・深さ約15cmを測るやや角のある円形を呈し、底面はやや北に傾斜していた。炭化物層がレンズ状に挟まれていたが、遺物は出土しなかった。

地形的には古墳を想定する所であったが、地山が不安定であるためかその痕跡は検出されなかった。この状況は、IV区の状況と同様である。



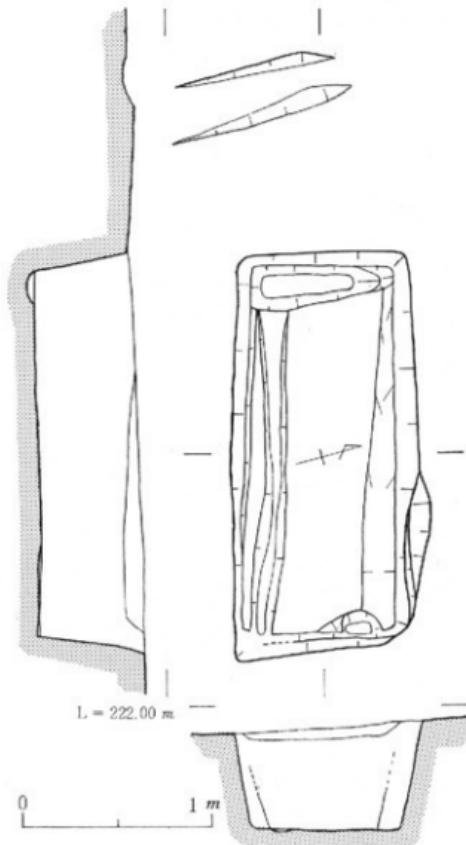
第7図 III区土塗実測図

IV区

南西端の南斜面が破壊されていた。当初の協議では外れていたが、本調査中の協議で追加された。

南北は尾根据と想定する範囲、東は協議結果の東端を範囲として全面調査をした。地形の主要部分は、地山が不安定であるためか何ら遺構は検出されなかった。しかし、東端の尾根から少し下りた東斜面が張り出た、表土直下の地山のやや安定した所から遺構を検出した。

遺構（第8図）は、検出面で長軸 N-75°W・長さ 2.11 m・幅 1.00 m・深さ 0.58 m、底面で長さ 1.98 m・幅 0.77 m・幅 0.77 m を測る長方形プランの埋葬施設である。底面



第8図 埋葬施設実測図

四壁際の落ち込みや土層の観察から底面で、長軸N-72°W・長さ1.77m・幅0.45mを測る組合わせ木棺と推定される。組合わせ方は、西小口は外側にそって深く、東小口は外側にそって南北板とはほぼ同じ深さ、南北板は南がより深くなっていた。底面は、中央から東側に微妙に傾斜していた。検出中、東端底面から厚さ約5cmで土色が異なっていた。東西・南北約40cmの隅丸方形に西から内接する円形のさらに土色の異なる部分があった。遺物は出土しなかった。

検出面の地山の状況は、埋葬施設の南壁ラインで異なっていた。また埋葬施設の西0.7mに、長さ1.0m・幅30cm・深さ8cmの溝を南北方向に検出した。地山は、この付近から西・北は不安定であった。

全体を調査していないため不明確であるが、方形と考えられる。規模は、東西約6m・南北約5.5mを測る。東・南は明確な斜面があり、西は極浅い溝により区画され、北は斜面を削り墳丘半坦面を造っていた。墳丘の高さは、南斜面から考えて約0.8mであった。ただし、東側については、地形的にはさらに東側に広がる可能性がある。また、埋葬施設がさらに存在する可能性もある。早急な対応により、全体を把握することと今後の保存対策の基礎資料を得る必要がある。

埋葬施設から西約4m、表上下第1層の地山崩壊土から須恵器杯片（第9図）が出土した。器形、大きさなど前例のないものである。高台回りは、へら状工具による調整の後回転などでしているようである。時期など不明なため不正確であるが、古墳とは直接つながるものではないと考える。



第9図 須恵器実測図

- 註1 県文化課・吉川氏・町教育委員会
註2 宮本氏・吉川氏・町教育委員会
註3 吉川氏・宮本氏・町教育委員会
註4 南崩壊斜面下にある古墓群の中で最古の銘文は明和年間（年不明）
註5 吉川氏御教示による

ま　と　め

今回の調査対象となった所は、中山古墳群所在の丘陵の中でも最も南の丘陵上である。中山古墳群の中では、A区に属し丘陵根元部分である。南側には、東明寺山北西麓からの広い斜面があり、いかにもこの地を意識するかのような立地である。

I～III区は、丘陵尾根の大半ないし半分が破壊されたところである。したがって、遺構は検出されたにもかかわらずその性格や時期を判断するまでには至らなかった。唯一IV区は、丘陵全体が残っていたため古墳1基の半分であるが、その様相を明らかにすることことができた。

溝状遺構を3本検出したが、等高線に沿った1本と他の2本とは方向などから性格は異なると考える。性格や時期は不明である。川石群についてはなんらかの有機的なものがあると考えるが、性格や時期は不明である。柱穴についても同様であるが、旧表土の下のものもありかなり古いといえる。土括はともに性格や時期は不明であるが、同一の性格のものではない。また、時期も異なる可能性が高い。しかし、古墳に付随するものではないと考える。

III区までのところで古墳を想定する時、I区とII区西端では裾部分は旧表土をそのまま残していたと考えられる。その他は、削り出しによるものと考えられる。古墳として最も可能性のあるII区は、等高線に沿った溝付近が裾であろう。

古墳は、やや東西に長い方形ないし長方形を呈し盛土をほとんどもたないものである。埋葬施設は、1基ないし複数である。検出した埋葬施設は、組合せ木棺を入れたものである。頭位は、検出中に東側底面付近での土色変化が一つの決め手となろうが、底面が微妙に東に傾斜していることも考慮する必要がある。現段階では、東と西のどちらとも決定しがたい。この古墳を中山AO6号墳とする。本古墳群の中での時期的位置は、墳丘をもたないものから墳丘をもつものへの段階のものと考える。また、南側の広い斜面を意識したものであろう。

本古墳の東（丘陵根元側）には、3ないし4基の古墳が想定される。1ないし2基は、本古墳に似通った立地をしていると考えられる。頂上のものと直ぐ西のものは、かなり広い平坦面があり明確に古墳とは断定しがたい。平城跡との関連も考えておく必要がある。

以上のことから本古墳の正確な規模ないし形を把握することは、東側の保存と活用を考えるうえで重要なことである。また、本古墳群の形成過程をより確かにすることにもつながるものである。

参考文献 「中山古墳群発掘調査概報」 石見町教育委員会 1977年
「石見町の遺跡」 同 上 1983年

東明寺城跡

調査後全景（北から）

A O 6 号墳



図版 II



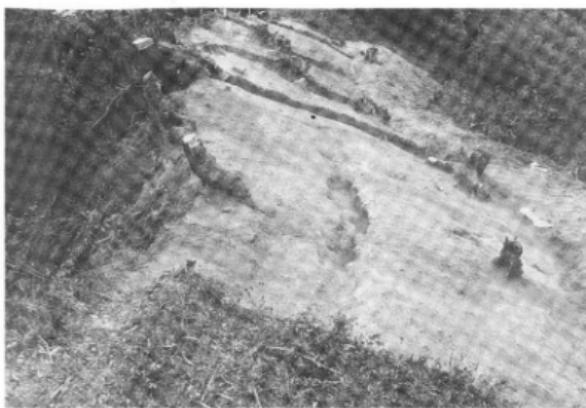
1.
I・II 区
調査前全景
(西から)



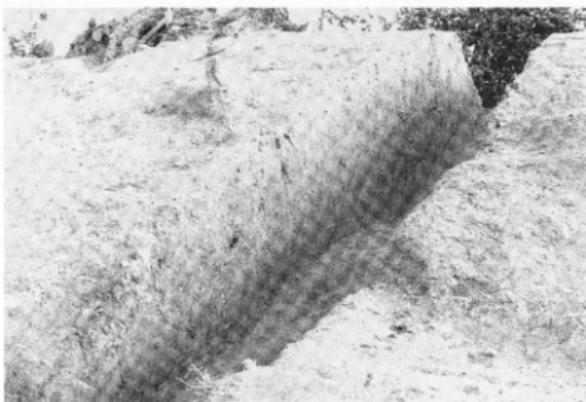
2.
I・II 区
調査後全景
(西から)



3.
I 区東溝全景
(北西から)



1.
II 区調査後全景
(東から)

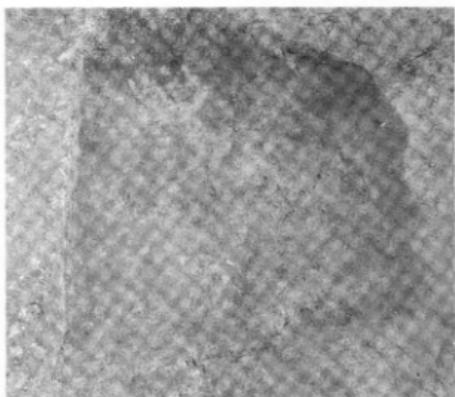


2.
II 区南北土層状況
(北西から)

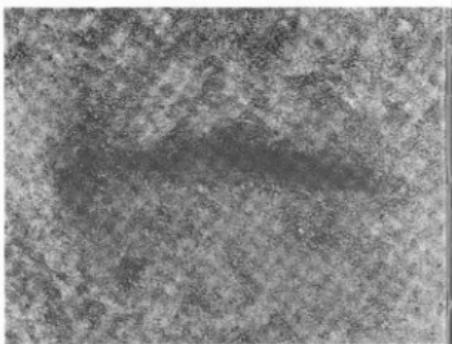


3.
II 区東西土層状況
(北から)

図版 IV



1. III 区東土拵近景（北から）



2. III 区西土拵土層状況（北から）



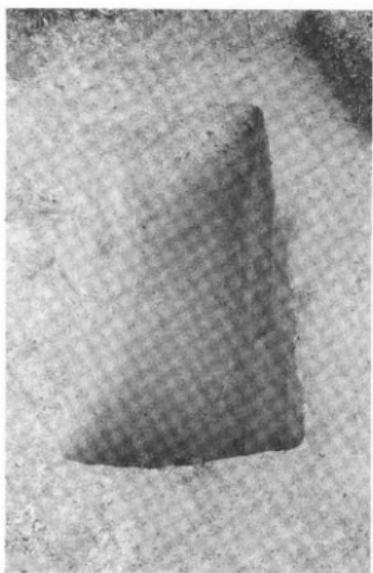
3.
IV区調査前全景
(西から)



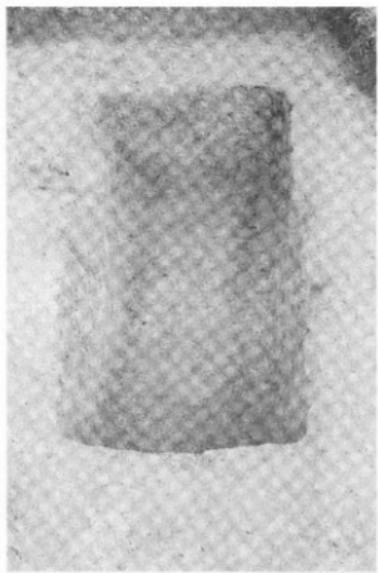
4.
中山AO 6号填塗状況
(西から)



1. AO 6号墳検出状況（北から）

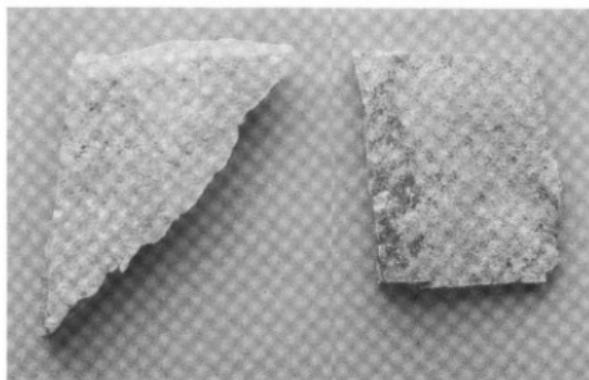


2. AO 6号墳埋葬施設つめ土検出状況（西から）

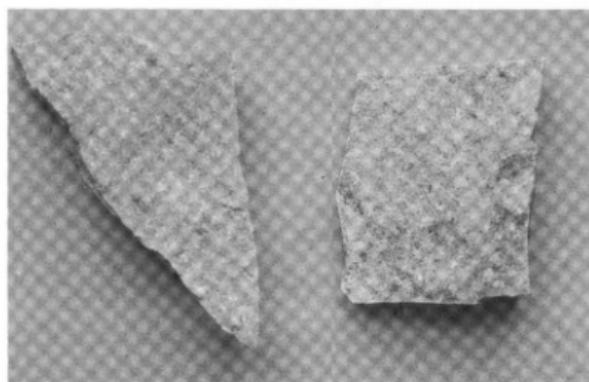


3. AO 6号墳埋葬施設完掘状況（西から）

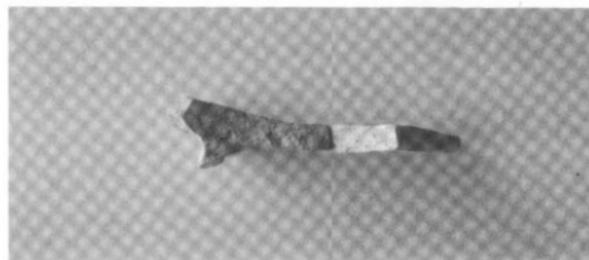
図版 VI



1
石材（表）



2
石材（裏）



3
須恵器

中山古墳群発掘調査報告書

発行 烏根県邑智郡石見町教育委員会

印刷 柏村印刷株式会社

発行 年月日 平成元年3月31日